



東京・春・音楽祭 2026 SPRING FESTIVAL IN TOKYO

N.J.ジヴコヴィッチ：トゥ・ザ・ゴッズ・オブ・リズム ジェンベとヴォイスのための

ジェンベとヴォイスのための「トゥ・ザ・ゴッズ・オブ・リズム」は、セルビア出身の打楽器奏者・作曲家ネボイシャ・ヨヴァン・ジヴコヴィッチによる、原始的なパワーに満ちた作品。タイトルにある通り「リズムの神々に」捧げられた本曲では、アフリカの打楽器「ジェンベ」と演奏者の「声」が激しく交錯する。それは単なる演奏を超えた、創造的パフォーマンスを志向している。

M.ベニーニョ=A.エスプレ=A.ノワイエ：

これはボールではない 音楽劇とマイムとボディ・パーカッション

音楽劇とマイムとボディ・パーカッション「これはボールではない」は、ルネ・マグリットの絵画「これはパイプではない」に通底するアイデアを持ったユニークな作品。ボールというありふれた物体の意味が、音楽、マイム、そしてボディ・パーカッションを通して解体・再構築されていく。

M.ナース：シンデレラ

音の素材を独創的に扱うことで知られる、ドイツの現代作曲家マイリト・ナースの作品。この「シンデレラ」では、（シンデレラが履いた？）「ハイヒール」を楽器として使い、多様な音色やリズム、時には静寂をも取り入れながら、おとぎ話の背後に潜むフェティッシュな世界を露呈させる。

J.ケージ：コンポーズド・インプロビゼーション スネアドラムのための

スネアドラムのための「コンポーズド・インプロビゼーション」は、現代音楽の巨匠ジョン・ケージが晩年に取り組んだシリーズ。「作曲された即興」という一見、矛盾したタイトルは、ケージの「偶然性の音楽」と相関しており、あらかじめ決められた枠組みの中で、演奏者はその瞬間に生起する唯一無二の「音の対話」を試みる。

T.ドゥ・メイ：テーブルの音楽

「テーブル（板）」が楽器に変わるという、現代パーカッション・アンサンブルの一側面を鋭く切り取った作品。3人の演奏者が素手でテーブルを叩き、擦り、滑らせる動きは、音響的な面白さはもちろん、ヴィジュアルそれ自体が音楽として機能する、究極のミニマル・アートと言える。

C.カンジェローシ：

スライト・オブ・イーヴィル・ハンド スネアドラムとメトロノームのための

ジェンダー・オブ・メタル マルチパーカッションソロのための

スネアドラムとメトロノームのための「スライト・オブ・イーヴィル・ハンド」は、アメリカの打楽器奏者・作曲家ケイシー・カンジェローシによる、洗練されたテクニックを満喫できる作品。正確無比なメトロノームのリズムに、演奏者の「邪悪な手（Evil Hand）」が即応しながら、機械と人間の対話をスリリングに描く。

マルチパーカッションソロのための「ジェンダー・オブ・メタル」は、同じくカンジェローシの作品で、マルチパーカッションを駆使して、金属が持つ冷徹な質感から熱を帯びたソリッドな響きまでを縦横無尽に拡散させる。

V.グロボカール：？コーポレル ひとりの打楽器奏者が自分の肉体の上で演奏する

ひとりの打楽器奏者が自分の肉体の上で演奏する「？コーポレル」は、ヴィンコ・グロボカールの意欲作。楽器をいっさい使わず、演奏者の「生身の肉体」が楽器と化す。胸を叩く音、肌を擦る音、叫び声、呼吸——それらは、楽器の起源が「身体」であったことを想起させると同時に、演奏者の内面をさらけ出す「エクスペッション」に新たな可能性を付与する。